

## 渡辺武男先生を偲ぶ

飯山敏道（地質学教室）

元理学部長（昭63～65）渡辺武男先生は、虚血性心疾患のため、昭和61年12月18日逝去された。享年79歳であった。昨年6月頃までは、毎週金曜日の夕方行方。地質学第3講座のゼミナールに來られ、熱心に学生達の話聞かれ、先生が興味を持たれると、その学生を後で激励して下さっていた。数年前からパーキンソン氏病にかかれ、お手足が段々御不自由になるのを、つとめて手足を使って、防いでおられた。数度か路で転ばれ、御家族が御心配になって、外出をおひかえになるようおっしゃっても、機会を作っては、鉾山に鉾床の産状や鉾物を見にお出かけになると言う頑張りようであった。先年渡辺先生が長野県の浜横川の鉾山は面白いから機会があったら行って来なさいと言われ、講座総出で行ったことがある。小さな閉山寸前のマンガン鉾山で、枯れ葉が積った山道を登って行く丘の中腹にある。ややもすると枯葉に足をすべらすので、少し緊張する所であった。鉾山の方の話で、先生は数ヶ月前に來られましたとのことであった。一同先生が無事であってよかったと痛感したのであった。一高時代にサッカー部におられたことや、御尊父が非常な国際派の海軍将校であられたこともあって、ファイトの上では先生の右に出る者は稀であったのではなからうか。

強いファイトの持主であったが、先生の下に居ると、先生のどこに、あれ程のファイトがひそんでいるか知らずと思ってしまう。それ程温和一筋のお方であった。皆が研究上のことで、“ああでもない”“いや、それはおかしい”。などと一つの問題の核心にふれられず、堂々めぐりをしていても先生は微笑をたたえて、聞いておられるだけである。ゼミの時間はどんどんたって、4時に始まったのが8時になっても終り相もない。結局皆がくた



びれて、お開きになるのだが、先生は何も言われない。先生に御意見を求めても、両方の意見の中の正しい点を云われるだけで、先生に判事役をお願いすることは出来なかった。先生がはっきり物を言われるのは、こちらから先生の御経験を伺う時だけであった。それも、公の席では、かなり総括的なことに止るのが常で、個人的に伺った時にはじめて、詳しく、先生の観点を説明して下さるのであった。先生がお亡くなりになって後、御家族、御親族の方とお話した時、渡辺先生が怒られたのを見たことがないと言うのが皆様の一致した憶い出であった。このように先生は公私両面において、柔和な方であった。

科学上の御研究でも、先生のアプローチは独特であったとしか言いようがない。私共の分野では火山、温泉などごく一部の現象を除くと、岩石、鉾物の生成過程を目で見ることができない。地下深所で起ることであり、たとえ見ることができたとしても、少くとも百万歳まで生きなければ見られない。見ることができるのは、その現象の最終生成物である岩石、鉾物だけなのである。凡人の我々は、せっかちだから、ある程度見切りをつけ

て、仮定を立て、その仮定がなりたてば、こう言うことがある筈だと、これを支持する事実を探すのに夢中になってしまう。渡辺先生の場合は、まず岩石や鉱物を詳細に観察される。しかし何も言われない。詳細さは驚く程なのだが、何故何も云われないのかと、不思議に思われる程なのである。やがて、脇の人に、“こうではないかと思う”と言われ、皆が“あっ”と思わせられるのであった。先生は、観察を通じて、自分御自身が対象と一致してしまう時を待たれる。一致して、混然一体となると、そこから岩石の生成過程の姿が見えて来ると言う訳である。

深海潜水艇による深海底の観察がしばしば行われ、海底の火山活動に伴って、銅、鉛、亜鉛、金、銀など有用金属濃集の場が形成されるのが目のあたりに観測されるようになった今日では、この鉱床は昔海底で起った火山活動に伴って形成されたが今は陸化して、鉱山として開発されているのだと言っても、これを疑う人はいない。しかし、このような観察事実がまだ知られていない時点で、この可能性を指摘し、多くの人をして、このことの証拠を沢山見出させた人は少い。それが渡辺先生その人であったのである。

私達が学生であった昭和25~26年頃には、まだ先生にこのお考えは固っておられなかったようである。今は閉山になってしまった別子銅山で代表される含銅硫化鉱床のお話をされた時、先生は、鉱液が結晶片岩のひだを通して昇って来てこの種の鉱床が形成されたように云われた。又東北地方に存在する黒<sup>クロコウ</sup>鉱のお話でも、凝灰岩を主とする第3紀層のある層準に撰択的に鉱液がしみこんで、岩石をおきかえて、これ等の鉱床が形成されたと言うふうにお話しされ、私達は何とも不思議で、納得できないまま鉱床学の単位を頂いて卒業してしまったのであった。その後先生は多くの学生の卒論のフィールドとして、これらの鉱床の調査をさせられ、御自身も足繁くこれらの鉱山に出掛けられ、観察しておられた。やがて、これらの鉱山の鉱床は、そのまわりの岩石（母岩）と同時に形

成された可能性が強いと言うことを言われ、学生達に留意して観察することをすすめられた。又黒鉱については、この黒鉱の粒は他所で形成されたのが移動して来て堆積したものではないかと言う疑問を投げかけられた。先生の研究の成果は、何時もこのように淡々とした雰囲気の下で世に知れて行くのであった。新しい見解であるから、すぐ世人に受け入れられない。反対する人も出る。先生はこれに対し、殆んど反論らしい反論もされないうで、聞く側に立たれていた。やがて論文がいくつか、先生御自身又は門下生によって発表され、日本および世界の人が静かに注目し始めると言う過程をたどるのであった。何時しかKUROKOの単語がそのまま外国人の書く論文は使われるようになったのである。

先生のこのやり方は、人と人との関係でも同じで、黙って皆の意見をきかれるだけの先生なのに、何時の間にか最も妥当な方向に皆の考えがまとまって行くのであった。こんな訳で、種々な会議、委員会は競うように、先生に御出馬を願うようになってしまって、先生の教授室のお席は温まるひまもなくなってしまった。頼まれれば断わることが出来ない先生に、皆は次から次に先生に重荷を課したのである。日本のみならず、国際委員会からも所望され地球をまたぐ先生の毎日が始まってしまった。

当時パリに在住していた私は、月曜に先生が着かれたとのお電話を頂き、一夕お目に掛り、木曜にお発ちになる時、“又来週水曜日に来ます”と言われ、呆れてしまったことがある。

とうとう先生は理学部長に選挙され、お忙しい日々の中で、折さえあれば時間を盗むように、研究を続けておられた。御定年後も、名古屋大学教授を同学の定年まで勤められた後、秋田大学学長に就任され、東京-秋田間を往復される時期が始った。この重責にも、先生は、持ち前のファイトをもって当られ、諸事を処理しておられた。この期間で最も大変だったのは、大学紛争ではなかったかと思われる。トラックの荷台に立って、マイ

クを持って、学生に、“この渡辺をどうか信頼して呉れ”と学生を説かれ、事態を収拾されたと言う武勇伝も残っている。

この一連の渡辺先生の日常について、“先生は何時も、研究三昧にもどりたいと言っておられるのに何故、行政的なことを承諾されるのか、断ればよいのに”と言う人もいた。私は、これは、先生の気持を理解していないこともおびたしいことだと思う。先生は恐らく“自分がこの苦役をひきうければ、誰かが助かる。場合によっては、前途ある若い人がその研究のポテンシアリティをあげる時間を持つことができるかも知れない”と考えて、苦役を背負ってしまわれると言うのが先生の心情であったと私は思う。先生と総合研究資料館のことや、発見された新鉱物の事等も記したいがこのことについては、資料館がすでに立派な出版物を出されているので、重複をさけさせて頂く。

さきに筆者は、坪井誠太郎先生の追憶も書かせて頂いた。私共は、坪井、渡辺両先生に相次いで逝かれ、まことに心細い思いをしている。両先生を思う時、研究における真理へのアプローチの仕方といい、学界、大学内、大学外における御活動の仕方といい、非常に対称的であったように見えるかも知れない。

しかし、結果的には、お2人とも非常に多くの貢献をされたのである。このことは、自然、精神両面において、人間が真理を探究する道にはある定まった方法、フォーマットなどと言うものは存在せず、探究者は持って生れた性格と生い立ちに従って自由にその方法を編み出してよいことをお2人の先生が身をもって示されたのだと思う。そして両先生に共通している。謙虚で詳細な観察、深い洞察、そして良心に恥ずることない誠意は、探究者としての必須条件であることをも語って下さっているのではなかろうか。